

教育の森

— Kyoku no mori —

音・かたちで希望を届ける

東日本大震災 10年

「あの日」に学ぶ

「あした」を守る

音楽・芸術

東日本大震災を知り、身近な防災を見つめ直す『あの日』に学ぶ『あした』を守る』の第11回は音楽・芸術、「希望を運ぶ音・かたち」です。震災後の日々の中から生まれた歌や絵は被災者の心を温めるとともに、震災を語り伝える役割も果たしてきました。演劇や映画というかたちで表現された被災者の心は、今とこれから生きる人たちに大切なものを届けてくれます。【百武信幸】

東日本大震災後に生まれた歌

▽仙台市復興ソング・中学校バージョン

「仲間とともに」(1番を抜粋)

私には何が出来るだろう
感謝の気持ちを忘れないこと
復興を心から祈ること
優しさと笑顔をみんなに届けること
不安で前が見えなくなったあの日から
私たちは歩き始めた
未来という光を目指して
前へ前へ仲間とともに 一歩一歩力強く

▽大船渡保育園歌「さかみちをのぼって」

(3番を抜粋)

さかみちをのぼって だきしめるあおぞら
ふりむいてきくのは おわらないなみのうた
なみだのぬくもりは たいようのほほえみ
さかみちをのぼって だきしめるあおぞら

心とませる歌

巨大地震と津波が海辺のまちを襲った直後、あすをも見えない不安の中においた被災者の前に、柔らかな歌声が響き渡りました。歌ったのは仙台市若林区の八軒中学校合唱部の生徒たち。間近に迫っていた全国大会が震災で中止となり、そこで歌うはずだった「あすという日が」という曲を避難所になっていた校内で歌い、被災した人たちを温かく包みました。

音楽には、人の心を和ませ、元気づける力があります。1995年に起きた阪神大震災の後にも、当時小学校の先生だった臼井真さんが作詞・作曲した「しあわせ運べるように」という歌が被災者を励まし、今も子どもたちによって歌い継がれています。

東北でも、仙台市内の児童生徒たちが「自分たちで歌を作ろう」と声を上げ、歌詞も募集して二つの復興ソングを2013年に誕生させました。小学生向けの「希望の道」と中学生向けの「仲間とともに」です。

市内全校にCDを配布するため合唱を録音した仙台青陵中等教育学校の馬目佳代子教諭(59)は、この7年で歌われ方が変化してきたと感じています。「直後は、歌に感謝や『ともに頑張ろう』との思いを込め、子どもたち自身が自分を励ます部分もあったが、いま歌うのは当時を知らない子どもたちなので、歌が震災を知るきっかけになっている」。授業で毎年歌うことによって、歌詞に込

める気持ちがより強まるのを感じるそうです。

岩手県大船渡市の大船渡保育園には、震災後に生まれた園歌があります。「さかみちをのぼって」という歌で、支援に訪れた作曲家の千住明さんが作った曲に、詩人の寛和歌子さんが被災者の声から歌詞をつけました。

歌詞には、坂道の途中にある保育園やまわりの風景が描かれています。直接的ではないけれど、地震が来たら高台へ避難することの大切さを伝えていて、まだ幼い子どもは、3番までそれで歌い上げるそうです。富澤基子理事長(77)は「今は意味がよく分からなくても、歌が体にしみこめば、大きくなった時、『この歌ってこういう意味だったんだ』と気づいてもらえる」と願いを込めます。この歌を基にした「坂道のうた」という合唱曲も作られ、県内の高校生らが歌い継いでいます。

未来を照らす絵

がれきに向かって立つ5人の子どものたち。この絵からどんなイメージを思い浮かべますか。「立ち向かう強さを感じた」という人がいれば「生きることは大変」「でも1人じゃない」と受け止めた人もいました。

それは、宮城県女川町出身の神田瑞季さん(28)が中学生の時に描いた「生きる」という絵です。被災から

演じて託す被災の心

福島県広野町にあるふたば未来学園高校の演劇部は3月、同県双葉町の伝承施設で劇を上演しました。東京電力福島第1原発事故の影響で古里を離れるしかなかった経験や地震におびえる心の傷、避難先でのいじめの記憶も表現しました。同高2年の大和田紗希さん(16)は「劇では取り壊された家など、舞台上で再現できないものをそこにあるように演じます。役者もお客さんも同じ世界を共有できるし、本気でその世界を演じると実物が見える感覚があり、それが演劇の楽しいところ」と話します。

紗希さんは原発事故後に福島県富岡町から茨城県に避難し、その後、広野町に移りました。高校1年の授業で富岡にバスで行く機会があり、劇ではその場面を再現しました。茨城での4年間は楽しい思い出で、「み

なはずは辛い記憶があるのに自分にはない。楽しいって思っていたのにな」と感じてきたという紗希さん。この劇を通じて仲間の経験を体感する一方、自分の思い出を演じることで「この場面好きだな」と前向きに見つめ直し、素直に表現していいと思えたそうです。

いま演劇部が創作中の舞台は、部員でもあるマンマの交換留学生の思いがテーマ。母国で車によるクーデターが起きたため、帰国できなくなりました。「突然家に帰れなくなることや、『当たり前』の日常が幸せ」と言う彼の言葉は震災と重なる」と紗希さん。「日常への感謝」や「自由」について考えながら作品を形にしようとしています。

宮城県石巻市でも3月、大川地区出身の佐藤そのみさん(24)が日本大芸術学部の学生時代に監督した「春をかきねて」という物語が上映されました。思春期の描られる心や友情が、そのみさんが育った石巻の風景

らしく、その後も絵を描き続ける上で特別な作品になった」と振り返ります。

16年には、祖父との別れや震災の傷と向き合い、「なみだはあふれるままに」という絵本作家の内田麟太郎さんと作りました。「絵を描くことは私にとって祈り。色はその日を明るくしたり心を温かくしたりする力がある。自分が背中を押されたように、絵を通じて見る人の心に色を届けたい」と瑞季さん。2冊目の絵本づくりを進めています。

福島県いわき市の鈴木姫花さんが描いた灯台の絵はいま、ハンカチとなって人々のもとにあります。家族でよく訪れた地元の塩屋崎灯台がモチーフ。小学4年生だった姫花さんは下校途中に立ち寄った祖母宅で津波にのまれました。

デザイナーになるのが夢だった姫の夢を形にしようと、父貴さん(45)は支援者の後押しで絵をハンカチに。この10年で1万人以上の手元に届けられ「姫花は亡くなった後も友達が増えて、絵のようにニコニコ喜んでいるだろうな」と貴さん。「楽しいそんな絵にひかれてハンカチを手にした人が、後で震災のことを知る。それが自分の命を守ることにつなが

「東日本大震災・原子力災害伝承館」で演劇を上演するふたば未来学園高校演劇部の大和田紗希さん(手前右から2人目)ら。福島県双葉町の同館で3月6日、大倉英揮さん撮影、同高提供



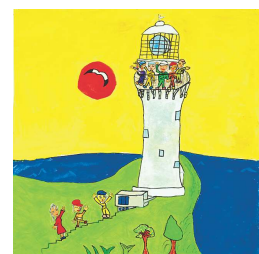
の中で描かれます。「妹を亡くした『遺族』としてメディアの取材を受け、外から見られる自分と『本当の自分』の間で苦しむ14歳の祐未。そして、自分の心に素直に生きているように見える、れい。震災という非日常と、それでも続く日常の中で、2人はある日、心をつつけ合い、互いに傷を抱えていることを知ります。作品の終盤で、祐未がれいにこんな言葉をかけます。「いいよ、も



イラスト:ユウタカ



●女川町出身の神田瑞季さんが震災直後に描いた「生きる」—瑞季さん提供●鈴木姫花さんが描き、ハンカチにもなった灯台の絵—父貴さん提供



ればいい。家族にとっても、ハンカチは生きる支えになっている」。姫花さんの夢は、描いた灯台のように未来を照らす道しるべとして生き続けています。



う。私もれいも好きに生きよう。これ以上つらくなる必要なんてない)。そのみさんも震災で大川小6年生だった妹のみずほさんを亡くしました。自分の一部を投影した映画を通じて、心の中で止まったままの時間と向き合いました。「『震災』を背負いながら生きていく」というメッセージを、自分と同じ境遇にある人へ向けて込めたそうです。いまは震災というテーマから離れた映像表現への挑戦を考えています。

主役の祐未を演じる藤原小夜子(左)に演技指導をする、監督の佐藤そのみさん(右)が宮城県石巻市の大川小学校舎で2019年3月26日、百武信幸撮影